

依頼会話【先行部】の考察

－日本語母語場面、台湾人母語場面、 日台接触場面のロールプレイデータを比較して

徐 孟鈴

キーワード 依頼会話、【先行部】、意味公式、ロールプレイ、台湾人上級学習者

0. はじめに

Blum-Kulkaほか(1989)は、各言語文化にはそれぞれ特有のポライトネス・ストラテジーがあるとし、依頼行動においても異言語文化間の社会語用論的な相違が見られることを明らかにしている。Kasper(1998)は、中間言語語用論の観点から外国人学習者の社会語用論的な誤用(socio-pragmatic error)について考察し、学習者の誤用には母語の影響、目標言語との談話構造の相違、学習訓練の影響、などの要因が考えられると指摘している。

本稿では、中間言語語用論の立場から上級の台湾人日本語学習者(以下TJL)¹の日本人との接触場面(以下TJL⇔J)における依頼行動に焦点を当て、日本人同士の母語場面(以下J⇔J)、台湾人同士の母語場面²(以下T⇔T)における依頼行動と比較する。

なお、本稿では依頼会話の【先行部】における依頼側の依頼行動に限定して分析を行う。【先行部】とは、依頼側が依頼を行う意図を持って話題を切り出すところから依頼を明言するまでの談話の部分指す。相手への負担が大きく、頼みにくい依頼を行う場合には、依頼を引き受けてもらえるかどうかを探ったり、それとなく依頼を匂わせるための発話がなされる。依頼を言明する前の、このような発話に焦点を当てて分析を行う。

本稿の目的は、TJL⇔JにおけるTJLに見られる中間言語語用論的な問題の一端を明らかにすることである。

1. 先行研究と研究課題

依頼行動について日中対照研究を行なった研究には浜田（1995）、水野（1996）、謝（2001）、池田ほか（2002、2005）などがある。

浜田（1995）は、依頼の前に現れる「聞き手の意志や都合を尋ねる慣用表現」に着目して分析を行い、中国語は日本語に比べて、この種の慣用表現が少ないと述べている。一方、水野（1996）は、日本人と中国人学習者を比較し、依頼の前触れとも考えられる慣用表現の使用状況について両者の間に使用頻度の差は見られなかったと報告している。また、池田ほか（2002）は、依頼の開始部における中国人学習者の「都合聞き」の使用頻度は日本人より少ないと述べている。

謝（2001）は日本語と中国語の依頼談話の展開について調べている。その結果、中国語では自己主張を優先する単刀直入な言い方を好み、談話の最初から依頼の核心に触れて、依頼をするような展開を好む傾向があることを報告している。しかし、池田ほか（2005）は、依頼に先立つ「情報提供」の量について日本人と中国人上級学習者を比較し、学習者の方が日本人より情報提供の量が多かったと述べている。その理由として中国語の談話では日本語の談話以上に依頼の理由付けが必要だと認識されている可能性がある指摘している。

これまでの研究を見るかぎり、依頼に先立つ都合聞きの使用頻度、依頼に関連する情報提供の量、談話の展開についてまだ明確な研究結果は出ていないと思われる。

そこで、本稿ではT J Lが依頼の【先行部】でどのようなコミュニケーション行動を行っているかについて考察するため、次の2つの観点から分析を行う。

観点1：依頼【先行部】に現れる「意味公式」の種類とその使用頻度

観点2：依頼【先行部】に見られる談話展開の特徴

上記の観点にしたがってT J L⇔J、J⇔J、T⇔Tの3場面で比較し、母語場面とは異なるT J Lの特徴あるいは問題点を明らかにしていく。

2. データの収集

本研究はロールプレイでデータを収集した。場面は大学院入試の準備をしているAが先に入学している親友のBに勉強を助けてもらいたいと頼むという設定である。依頼を引き受けることは被依頼者にとっては負担の大きい設定であ

る。このような設定を決めたのは、大学院入学を目指している学生にとっては入学試験がもっとも大きい心配の種であり、留学生が実際によく遭遇する問題だからである。ロールカードは以下に示すとおりである。

ロールカード

ロールカードA：あなたは大学院に入るための勉強をしており、そのために「応用言語学」という授業を取っています。しかし、英語がまだ十分ではないので、授業が分からないのです。親友のBは去年あなたが受けようとしている大学院に合格しており、応用言語学の授業をとっていました。それでBに助けてほしいと思っています。Bは論文やバイトで忙しいのを知っていますし、謝礼を払うゆとりもありません。それでも悩んだ末にあなたはBに頼むことにしました。

Bの家を訪問し、しばらく雑談をしてから依頼を始め、Bが承諾するまで依頼を続けてください。

ロールカードB：親友のAが訪ねてきました。何か頼みごとがあるようです。しばらく世間話をしたら、受験のことで依頼の相談をしはじめました。あなたはAを助けてあげたいのですが、自分の論文やアルバイトが忙しいので依頼を受けるためには何らかの犠牲を払わなければなりません。断りたい気持ちをAに2、3回匂わせた後、仕方なく依頼を引き受けることにしました。

2-1 日台母語場面のロールプレイ調査

J⇔J及びT⇔Tの録音調査は2001年2月から2001年6月にかけて日本及び台湾で収集した。被験者は日本および台湾に在住する大学生及び大学院生である。平均年齢は日台ともに22歳である。それぞれ30組、合計60組（男性60名・女性60名；計120名）のロールプレイを収集した。外国語学習の影響を最小限にするために、お互いの言語についてあまり知らない者に限定した。³

2-2 日台接触場面のロールプレイ調査

T J L⇔Jの録音調査は1999年11月から2000年6月にかけて日本で実施した。T J L 30名にそれぞれ親しい日本人と会話するように依頼した。被験者の情報は表1の通りである。

表1 T J Lの情報

身分：日本在住の大学生、大学院生	平均年齢：24.5歳（SD=1.9）
平均日本語学習歴：6.8年（SD=1.1）	平均日本滞在期間：3.5年（SD=1.4）
日本語能力レベル：上級（全員日本語能力試験一級試験に合格しており、日本語で授業をうけ、論文を書いている学習者）。	

ロールプレイの中にはロールカードの指示を誤解したり、不自然に話の内容を誇張するなど日常の依頼会話とは大きく異なると思われるものがあった。そこで分析の前に台台母語話者それぞれ2人に録音テープを聞いてもらい、日常の依頼会話として不自然だと判断されたロールプレイは分析対象外から除外した(除外したのは接触場面6組、日本語場面7組、中国語場面9組)。その結果、最終的には接触場面のデータと母語場面のデータそれぞれ30組、合わせて90組(180名)、約450分間のデータを文字化した。文字化の作業は筆者が行い、次いで聞き違いがないか、書き漏らしがないかなどをチェックするために日本語と中国語の母語話者それぞれ1名に確認を依頼し、文字化資料の修正を行った。

3. 資料の分析について

3-1 依頼の【先行部】

依頼の会話は大きく【先行部】【依頼部】【終結部】の3つに分けられる。【先行部】は依頼側が依頼を念頭において話を切り出し、依頼を匂わせ、依頼を成功させるための準備を行う段階である。【依頼部】は「依頼の明言」という主依頼文によって開始され、依頼を巡る具体的なやり取りが展開される。依頼を実行するための約束が決まった時点で会話を終了してもよいとみることができる。従って既に決まった約束の内容の繰返しや再確認の発話は【終結部】の開始発話と見なす。【終結部】は基本的には「前終結－関係再確認－別れ」の3つの部分からなる。⁴

実際の会話では、依頼の内容や当事者の人間関係などによっては【先行部】が存在せず、会話の冒頭で「依頼の明言」が行われることもある。

しかし、本研究のロールプレイは依頼内容が相手に大きな負担をかけるものであること、被依頼側は一旦は依頼を断るといった状況設定がなされていたため90のロールプレイのすべてにおいて【先行部】が存在していた。

3-2 分析単位の「意味公式」

「意味公式」とは、“semantic formula” (Olshtain & Cohen 1983) の訳語で、発話行為を構成する最小の機能的な意味単位である⁵。Olshtain & Cohen (1983) は、「意味公式」は異文化間の発話行為の具現化のパターンを比較するのに適している機能単位であると述べている

よって、本稿では先行研究にならい、「意味公式」を分析単位として用いる。

3-3 「意味公式」の枠組

Blum-Kulka (1989)、村上 (1998) の枠組みを参考にしうえて、本研究の【先行部】を分析した結果、依頼側の発話は12の「意味公式」に分類できた。「意味公式」が現れる談話上の位置と機能、そしてその使用される頻度を考えうえて、【先行部】の「意味公式」を中核成分、補助成分、談話管理成分の3つのグループに大きく分けた。

中核成分：依頼を行なう前の予備的依頼行動であり、依頼を匂わせる働きもっているために、場合によっては主依頼文が欠けても依頼を伝えることができる発話である。こうした予備的な発話は依頼談話をうまく展開していくために有効であると考えられる。

補助成分：依頼文の前後に付け足して依頼をより効果的にするために用いられることが多い発話である。

談話管理成分：相手とのやり取りや談話の円滑な進行に役立つ発話である。本稿において設定した依頼側の「意味公式」は表2の通りである。

表2 依頼側の「意味公式」一覧

談話構成	意味公式の名称と定義	日本語の例
中核成分	1. 「相手の状況」：相手に情報提供や確認を求めて、依頼実現の可能性を確かめる発話	あの授業とったことあるよね
	2. 「苦境の説明」：困っている状況を説明する発話	先生が早口でついていけないの
	3. 「依頼の予告」：依頼するときの決まり語句	お願いがあるんだけど
補助成分	4. 「配慮発話」：相手の負担への配慮発話	迷惑だと分かってるんだけど
	5. 「条件緩和」：限定をつけて依頼の負担を軽減する発話	少しでいいから

補助成分	6. 「見かえり」：相手への貢献の申し出	御飯おごるから
	7. 「相手を立てる」：相手を持ち上げる発話	Bは頭いいから
	8. 「友情の強調」：お互いの親しさを強調する発話	だって友達なんでしょう
	9. 「冗談」：冗談を言うことによって明るい雰囲気を作る発話	私のような天才でもさすがに参ったのよ
談話管理成分	10. 「注目要求」：言い淀みや呼びかけなど相手の注意を喚起する発話	あのう／ねえ／Aちゃん
	11. 「相槌的発話」：先行発話に対する相槌的な応答	被依頼側：大変だよね 依頼側：そうだよね
	12. 「情報提供」：相手の質問への応答	被依頼側：；週回回バイトに行くの？ 依頼側：2. 3回かな

3-4 「意味公式」の認定作業

認定対象となる依頼側の発話は、意味内容によって最小の機能単位に区切ってから、3-3節の枠組みに従って「意味公式」のタイプの認定を行った。紙幅のために認定の一例は4-3節会話例を参照されたい。

「意味公式」の分類の妥当性を高めるために、共同認定作業を行なった。今回は日本語母語話者3名、筆者を含む台湾語母語話者3名、計6名によって「意味公式」の認定作業を行った。認定者がそれぞれ独自に作業を行い、「意味公式」の判定が違っているものについては認定者間で協議した。

判定の結果、3名の認定者間の一致率は、 $J \Leftrightarrow J$ は86.3%、 $T \Leftrightarrow T$ は88.5%、 $T J L \Leftrightarrow J$ は85.3%であった。3名のうち1名の判定が違って、認定者間で協議した発話率は $J \Leftrightarrow J$ は8.5%、 $T \Leftrightarrow T$ は7%、 $T J L \Leftrightarrow J$ は9.7%であった。3名の認定が異なる「意味公式」は分析の対象から除外した。除外したのは、 $J \Leftrightarrow J$ が5.2%、 $T \Leftrightarrow T$ が4.5%、 $T J L \Leftrightarrow J$ が5%であった。

4. 分析の結果

4-1 意味公式の使用人数と使用率

認定作業の結果【先行部】で依頼側が使用した「意味公式」の使用人数と使用率（回数）を表にまとめた。以下においては「中核成分」、「補助成分」、

「談話管理成分」の3つを順次取り上げ、3場面で比較、考察する。

4-1-1 「中核成分」

表3 「中核成分」の使用人数と使用率

談話の構成	意味公式	上段：使用人数、下段：使用率（回数）		
		J ⇔ J	T J L ⇔ J	T ⇔ T
中核成分	1. 相手の状況	100% (30)	56.7% (17)	53.3% (16)
		19.5% (89)	16.8% (58)	18.1% (71)
	2. 苦境の説明	100% (30)	100% (30)	100% (30)
		19.3% (88)	24.8% (85)	21.6% (85)
	3. 依頼の予告	40% (12)	50% (15)	66.7% (20)
		4.4% (20)	6.1% (21)	9.4% (37)
	小 計	—	—	—
		43.2% (197)	47.7% (164)	49.1% (193)

上記の表3では、中核成分の中で3グループとも「苦境の説明」が使用人数のもっとも高かった項目である。

「苦境の説明」は3場面において30名全員が使用している。これは、3場面ともに負担度の大きい依頼を行う場合には依頼を明言する前に「苦境の説明」を行うことがほぼ必須であることを示している。

次に使用率が高かったのは、「相手の状況」である。しかし、3場面において使用人数に大きな差が出ている。「相手の状況」については、J ⇔ Jが30人全員使用しているのに対してT J L ⇔ Jは17名、T ⇔ Tは16名と少ない。このような結果からは、J Jは依頼を明言する前に被依頼側の状況を尋ねるのが普通であるが、T J L ⇔ JとT ⇔ Tの場合には相手の都合を聞くことは必ずしも必須の要素ではないと考えられる。

「依頼の予告」では、T ⇔ Tの使用人数、使用率がともに3場面でもっとも高かったが、J ⇔ JとT J L ⇔ Jの間に大きな差はなかった。

以上の分析から、「中核成分」における3場面の一番の相違点は「相手の状況」にあることが分かった。使用人数において、T J L ⇔ JはJ ⇔ Jの半数近くしか使用していない。池田ほか（2002）は依頼の開始部で中国人学習者は日本人ほどには「都合聞き」の発話を使っていないと報告しているが、本研究の上記の結果は池田の結果と共通する面がある。

4-1-2 「補助成分」

次の表4の通り、「補助成分」には6つの「意味公式」を設定している。

表4 「補助成分」の使用人数と使用率

談話の構成	意味公式	上段：使用人数、下段：使用率（回数）		
		J⇔J	T J L⇔J	T⇔T
補助成分	4. 配慮発話	50% (15)	33.3% (10)	33.3% (10)
		5.5% (25)	4.3% (15)	5.1% (20)
	5. 相手を立てる	10% (3)	20% (6)	23.3% (7)
		1.5% (7)	2.0% (7)	1.8% (7)
	6. 友情の強調	6.7% (2)	16.7% (5)	6.7% (2)
		0.9% (4)	1.4% (5)	0.5% (2)
	7. 冗談	3.3% (1)	16.7% (5)	43.3% (13)
		0.7% (3)	1.4% (5)	3.6% (14)
	8. 条件緩和	3.3% (1)	13.3% (4)	6.7% (2)
		0.4% (2)	1.2% (4)	1.3% (5)
	9. 見かえり	0% (0)	0% (0)	6.7% (2)
		0.0% (0)	0% (0)	0.5% (2)
	小 計	—	—	—
		9% (41)	10.3% (36)	12.8% (50)

「補助成分」は「中核成分」に比べると、繰り返しにくいために使用回数が少なく、全体に占める割合が少ない。そこで使用人数の相違に注目したい。

使用人数で特に相違がみられた項目は「配慮発話」と「冗談」である。J⇔Jは「配慮発話」の使用がT J L⇔JとT⇔Tより多かったが、これは先行研究でも言われていることである（水野1996）。

一方、T J L⇔JはJ⇔Jより「冗談」を多く使用している。T⇔Tはさらにたくさん「冗談」を使用しており、J⇔JとT⇔Tの差は大きい。今回のT⇔Tのデータでは、依頼側の「冗談」にあわせて被依頼側が「冗談」で言い返して、依頼による会話の緊張感が両者の笑いによって吹き飛ばされた例が見られた。中国語では、相手への負担が大きく、頼みにくい状況では「冗談」のような補助成分がお互いの気まずさを解消するのに有効だと思われる。中国語社会では「冗談」のようなストラテジーは対人配慮にプラスに働いていると考えられる。T J Lの「冗談」の使用に関しては中国語の影響があるかもしれないが、今後さらに調べる必要がある。

4-1-3 「談話管理成分」

「談話管理成分」として「注目要求」「相槌的発話」⁶「情報提供」の3つの意味公式を設定している。次の表5の通りである。

表5 「談話管理成分」の使用人数と使用率

談話の構成	意味公式	上段：使用人数、下段：使用率（回数）		
		J ⇔ J	T J L ⇔ J	T ⇔ T
談話管理成分	10. 注目要求	100% (30)	96.7% (29)	96.7% (29)
		16.2% (74)	19.1% (66)	18.3% (72)
	11. 相槌的発話	100% (30)	93.3% (28)	93.3% (28)
		30.1% (138)	20.9% (72)	15.5% (61)
	12. 情報提供	23.3% (7)	23.3% (7)	56.7% (17)
		1.5% (7)	2.0% (7)	4.3% (17)
	小 計	—	—	—
		47.8% (219)	42.0% (145)	38.1% (150)

4-1-3-1 「注目要求」

「注目要求」は3場面ともにほぼ全員が使用している。使用率についてはT J L ⇔ J は両母語場面より高いが、量的には違いがない。しかし、表現内容に目を向けると質的な違いが見えてくる。これについては、4-3-2-2節で取り上げる。

4-1-3-2 「相槌的発話」

相槌的発話は、従来の意味公式の研究ではほとんど触れられていない。しかし、⁷表5からも分かるように、「相槌的発話」の使用率はJ ⇔ Jの意味公式の使用総数の約1/3を占めており、他の意味公式に比べて3場面でもっとも使用率が大きくかけ離れている項目である。表5の通り、J ⇔ Jの「相槌的発話」の使用率が30.1%であり、T J L ⇔ Jを10%ほど上回っている。T ⇔ Tの使用率は3場面でもっとも少なく、J ⇔ Jの半数ほどである。

この結果は、日本語には相槌が多いという一般的な見解を支持するものであるが、依頼行動においてもJ Jは被依頼側の発話に理解や共感を示す「相槌的発話」を使用することで依頼を円滑に進めようとしていることがうかがわれる。

4-1-3-3 「情報提供」

情報提供に関しては $J \Leftrightarrow J$ と $T J L \Leftrightarrow J$ の間に大差はない。 $T \Leftrightarrow T$ の場合は「情報提供」の使用が3場面でもっとも多いが、それは $T \Leftrightarrow T$ の被依頼側の「情報要求」発話が多いからである。 $T \Leftrightarrow T$ の被依頼側の「情報要求」発話がどのような意味を持つかについては、 $T \Leftrightarrow T$ 同士の談話展開を詳細に調べていかなければならない。

4-2 「中核成分」の「意味公式」の使用順序

本節では、「中核成分」の3つの「意味公式」の使用順序に焦点を当てる。分析結果は下の表6のとおりである。

表6 「中核成分」の「意味公式」の使用順序

先行する意味公式	$J \Leftrightarrow J$ (n=30)	$T J L \Leftrightarrow J$ (n=30)	$T \Leftrightarrow T$ (n=30)
【苦境の説明先行型】	5 (16.7%)	14 (46.7%)	20 (66.7%)
【相手の状況先行型】	20 (66.7%)	10 (33.3%)	6 (20%)
【依頼の予告先行型】	5 (16.7%)	6 (20%)	4 (13.3%)
合計	30 (100%)	30 (100%)	30 (100%)

表6でまず目につくのは、【先行部】の冒頭に【相手の状況先行型】を使用した者が $J \Leftrightarrow J$ は20人と全員の2/3を占めており、かなりはっきりしたパターンが見られたことである。 $J \Leftrightarrow J$ は30人が「相手の状況」と「苦境の説明」を使っており、この二つが【先行部】では重要であることが分かっているが(表3)、その使用順序を調べると、 $J J$ は【相手の状況】を先に出すような切り出しパターンを好む傾向があることが分かった。【相手の状況先行型】、すなわち「最近、忙しいんでしょう」「応用言語学、とったことあるよね」などの発話で切り出すことが多いということは、まず相手の状況に配慮したり、共通の話題を持ち出すことが日本語会話では重要視されていることを示すのであろう。

$J \Leftrightarrow J$ に対して、 $T J L \Leftrightarrow J$ は【苦境の説明先行型】が14人ともっとも多い。 $T \Leftrightarrow T$ では20名が「苦境の説明先行型」であることを考えあわせると、 $T J L$ の展開パターンには母語の影響があるのではないかと推測される。前節で報告した通り $T J L$ の「苦境の説明」の内容とそれに伴う語彙や表現には母語の知識の影響があるのではないと思われるが、【苦境の説明先行型】という展開パターンについても $T \Leftrightarrow T$ と共通した傾向が見られ、 $J \Leftrightarrow J$ グループとの間で大きく異なっていることが分かった。

$T J L \Leftrightarrow J$ で【相手の状況先行型】を使ったのは10人で、 $J \Leftrightarrow J$ の半分であ

るが、「相手の状況」を用いたT J L 17人(表3)のうち、10人がそれを依頼の冒頭に用いている。T J L ⇔ Jは「相手の状況」の使用率と使用人数がJ ⇔ Jの半分ほどしかないが、【相手の状況先行型】という切り出し型を多く用いることに関してはJ ⇔ Jと似た傾向を示していることが分かった。

以上、先行部で最初に使用される中核の「意味公式」について調べた結果、J ⇔ Jの場合は【相手の状況先行型】を2/3の人が使用しておりかなり一定したパターンが見られた。一方、T J L ⇔ Jの場合は【苦境の説明先行型】が一番多かったが、2位の【相手の状況先行型】も多く使用していることが分かった。【依頼の予告先行型】は3グループ間でほとんど差はなかった。

4-3 【先行部】の談話展開

本節では、ロールプレイデータを用いて、3つの場面における【先行部】の談話展開について比較する。4-3-1節では3場面の会話例を分析しながら、「話題と相手の関連性についての言及」に着目し、比較する。4-3-2節では意味公式に伴う「言語形式」と「語り方」について考察する。

4-3-1 話題と相手の関連性についての言及

1) J ⇔ Jの談話展開

まずはJ ⇔ Jの例をみていきたい。J ⇔ Jの会話ではJ全員が話題と相手の関係について述べている。次の会話例1でJ ⇔ Jの談話展開をみていく。

会話例1 J ⇔ J (A: 依頼側; B: 被依頼側、()内は被依頼側の意味公式)

- 1 A: どう最近忙しい? 「相手の状況」
 2 B: うんバイトねちょっと忙しくて 「(情報提供)」
 3 A: 忙しいよね(うん) 最近ね 「相槌的発話」
 4 B: そうだよね ちょっとあまり寝れんね 「(相槌的発話)」
 5 A: つかれとるよね 「相槌的発話」
 疲れとるのに悪いけど(うん) 「配慮発話」
 実はさあのさ今さ 「注目要求」
 受験勉強というやつをしてるんだけどさ
 応用言語学ってあるじゃん(うん) あのう授業で(はいはい)
 あのう入るのに(うんうん) Bとったよね大学院で 「相手の状況」
 6 B: とってたね うんやってた
 大変だったね(結構さ) あれ厳しいよね 「(情報提供)」
 7 A: そう厳しいよね 「相槌的発話」
 8 B: ね 範囲がすごい広いから 「(相槌的発話)」 「情報提供)」

- 9 A : だよね 「相槌的発話」
 あれ毎週宿題出るから大変だよね 「苦境の説明」
- 10 B : 確かにね (「相槌的発話」)
- 11 A : 大変なんだよね (両者笑) 「苦境の説明」
 うーん 「注目要求」
 でさ私英語あんまできんくてさ宿題がやばいじゃんね 「苦境の説明」
- 12 B : ああ 難しいもんね (「相槌的発話」「配慮発話」)
- 13 A : そう 「相槌的発話」
 宿題も (うん) こう多いじゃん 「苦境の説明」
- 14 B : そうだよね (「相槌的発話」)
- 15 A : ねえ 多いよね 「苦境の説明」
 (以下略)

会話例3では、1 Aと5 Aで「相手の状況」、9 Aと11 Aで「苦境の説明」が現れている。この談話では両者が共通に知っている応用言語学という科目を話題に取り上げ、互いに共通理解と相手への共感を示し合っている。

1 Aから5 Aの「つかれとるよね」までで被依頼側が忙しいということが相互に確認されている。同様に、5 Aの「応用言語学ってあるじゃん あのう授業で あのう入るのにBとったよね大学院で」から9 Aの「だよね」まででは、応用言語学が取り扱う範囲の広い大変な科目であることを互いに確認している。さらに、9 Aから15 Aでも依頼側Aの苦境に対して被依頼側Bが理解と共感を示している。

このように、J ⇔ Jの会話ではお互いの理解を常に確認し合い、共感づくりに配慮した展開がなされていることが観察された。

2) T J L ⇔ Jの談話展開

次にT J L ⇔ Jの談話展開を取り上げて分析する。前節で報告した通り、T J Lは「苦境の説明」を多く使用しているが、「相手の状況」を用いる人はJ ⇔ Jの半数ほどで17人である(表3)。「相手の状況」を用いた17人のT J Lのうち、相手と話題の関連性について言及しているのは僅か6名である。あとの11名は相手の近況と都合について質問をしているのみで、被依頼側と応用言語学という科目の関連性に言及していない。次の会話例2はT J L ⇔ Jの例である。

会話例2 T J L ⇔ J (A : 依頼側 T J L ; B : 被依頼側 J、() 内は被依頼側の意味公式)

- 1 A : Bなんかね実はすごくななか 「注目要求」

- 授業の宿題のことで(うん) 悩みを抱えてるんです 「苦境の説明」
- 2 B: あうん (「相槌的発話」)
- 3 A: 本当にどうしたらいいか分からないんですよ 「苦境の説明」
だから授業のことについてお願いがあるんですけど 「依頼の予告」
- 4 B: えっ それはなんという授業なの? (「情報要求」)
- 5 A: あのう 応用言語 「情報提供」
- 6 B: 応用言語って僕が去年取ったやつ? (「情報要求」)
- (以下略)

上記会話例2のように、T J Lが「苦境の説明」をもって会話を始めたが、話題と被依頼側の関連性について説明しないままで会話を続けたために、被依頼側 J Jが4 Bで「えっそれはなんという授業なの?」、6 Bで「応用言語って僕が去年取ったやつ?」と尋ねて、話題との関連性を自分で取り付けている例が観察された。

J ⇄ Jの会話では、話題について互いに理解と共感を示し合い、共通した基盤を築き上げながら話を展開していくが、T J Lは「苦境の説明」だけを繰り返すような展開をしているかという点で、J ⇄ JとT J L ⇄ Jの接触会話の間に相違が見られた。

3) T ⇄ Tの談話展開

さらに本稿のT ⇄ Tの談話データを調べた結果、相手と話題との関連性について言及した人は13名であり、J ⇄ Jに比べるとやはり少ない。そのうえ、言及の仕方については13名のTのうち、8名が既知の相手の情報を「依頼正当化の理由」として提示しており、Jとは異なっていた。T ⇄ Tの例を次の会話例3に示す。

会話例3 T ⇄ T (A: 依頼側; B: 被依頼側、()内は被依頼側の意味公式))

- 1 A: 應用言語學的課我覺得好難哦 我快撐不下去了 「苦境の説明」
(應用言語學的授業すごく難しくてもうだめになっちゃいそう)
- 2 B: 你還好吧 (「配慮発話」)
(大丈夫?)
- 3 A: 課業好重我覺得壓力好大哦 (嗯) 然後因為你有修過啊 「苦境の説明」
(授業がすごい大変ですごいプレッシャーなんだ
それであなたがとっていたから)
所以我想拜託你 「依頼の予告」
(頼みたいと思って)
(以下略)

会話例3のように相手と話題との関連性についての言及の仕方について、Tは3Aのように「然後因爲你有修過啊，所以我想拜託你」（それであなたが取っていたから頼みたいと思って）のように、相手が授業を取っていたことを既知の情報として提示し、そのことを「依頼正当化の理由」として提示していた。これは依頼の正当性を優先して主張している語り方だといえるだろう。J⇔Jは全員相手に「授業とったよね」のように、話題を相手に提示し、必ず「確認」を求めているのに対して、T⇔TとT J L⇔Jでは半数以上の方が相手と話題の関係については触れないで、自分の悩みについてのみ語っている。そして相手と話題について言及のあるときにもJ⇔Jとは違って、T⇔TとT J L⇔Jは相手が授業に出ていたことを「依頼正当化の理由」として用いている。

このように、話題と相手の関連性について触れるかどうか、またどのように会話を進めるかについてT⇔TとT J L⇔Jの間には共通性があり、J⇔Jとは異なっていることが分かった。

4-3-2 意味公式に伴う「表現形式」と「語り方」

4-3-2-1 「苦境の説明」と「相手の状況」

前節では日本語では理解や共感を示したり求めたりすることが多いことを報告した。次に談話を展開していく際に「苦境の説明」と「相手の状況」に伴う「表現形式」と「語り方」に着目する。

本稿のJ⇔Jのデータでは理解や共感を示すとき、「ね」「よね」「じゃんね」「でしょ(う)」などの表現を多く用いることが観察されている。上の会話例1でも、「よね」(5A、7A、9A、11A、15A)、「じゃん(ね)」(5A、11A、13A)が使われている。今回のJ⇔Jのデータでは、30人中25人が「よね」「じゃんね」「じゃなかったっけ」などの文末表現を使用していた。「相手の状況」と「苦境の説明」に限っても「よね」「じゃんね」「でしょ(う)」が合計101回使用されていた。

一方、T J L⇔Jの「相手の状況」と「苦境の説明」に現れた「ね」「よね」「じゃんね」「でしょ(う)」のような確認要求や同意要求の表現形式は僅か19回で、J Jの101回とは大きく異なっていた。T J Lの場合は、「相手の状況」が主に情報要求の質問文になっており、確認要求、同意要求を用いるJとは異なっていた。T J Lの「相手の状況」と「苦境の説明」には「～だ」「～だよ」のような文末形式が48回使用されていた。共感作りを目指すJの「よね」に比べると「～だ」「～だよ」を伴うT J Lの「苦境の説明」は自分の大変さを相手に訴えることに主眼をおいた語り方と言えるだろう。

さらに、前節の会話例2の一部にもあるように、「苦境の説明」の「語り方」

に関しては、T J Lは「悩みを抱えてるんですよ」「もううんざりだ」のような内面の感情を表す語彙を使っている例が観察された。これは中国語のデータにも見られる「很煩惱」、「我撐不下去了（受不了）」と似ており、J⇔Jでは観察されない表現である。また、T⇔Tでは、「如果沒有考上我就會被迫回國耶，我真的好煩惱喔」（受からなかったらそのまま帰されるよ、本当に悩んでる）のように、「悩み」について言及しながら、「承諾が得られないと大変な結果になる」ということを理由に挙げるTは16名と半数以上を占めている。

同じ「苦境の説明」でも、一方的に自分の悩みを訴える「大変なんだよ」と、相手との共感作りを目指す「大変なんだよね」のようなスタイルとは大きく異なっている。話題と相手との関連性について言及しない語り方、「だよ」、「～んだ」のような表現形式の使用、それから「悩みを抱えてるんだよ」のような自分の内面的心情を優先して言及するような「苦境の説明」からは、T J LはTと同様に、相手のことを優先して考えているというより、自分の悩みを優先して強調し、一方的に語る話し方をしているという印象を受ける。

4-3-2-2 談話管理成分

1) 「注目要求」

4-1-3節では3場面においての「注目要求」の使用率について報告したが、この節では、表現形式に目を向けて質的な違いについて述べる。

「注目要求」は発話冒頭の切り出し部分に現れる。名前を呼んで声をかけたり、「ねえねえ」のような呼びかけ詞を使用することで親しみや親近感を表すことができると思われる。一方、「アノー」は唐突さを避け、自分の恐縮さを伝え、遠慮の気持ちを表す「注目要求」だと考えられる。「注目要求」の表現に着目して分析したところ、今回のデータでは、A型（名前または綽名+言い淀み）、B型（「ねえねえ」のような相手の注意を引く言葉+言い淀み）、C型（「あのう」などの遠慮の言い淀みのみ）、の3つのタイプが認められた。

J⇔Jは【C型】が21人ともっとも多く、次に【A型】7人、【B型】2人の順である。J⇔Jでは「注目要求」として遠慮の言い淀みのみの【C型】を集中して使用する傾向がはっきりしている。

一方、T J L⇔Jは【A型】がもっとも多く25人であり、【B型】と【C型】がそれぞれ2人である。【A型】を多く使用しているT J Lは、相手を名前で呼びかけている点で特にJ⇔Jと大きな開きがあった。T⇔Tでは【A型】を使用したTが12人で、そのうち直接相手の名を呼びかける人が7人、相手を冗談めいた口調で「あだ名」あるいは「先輩」という立て方をした人が5人だった。そのほか「ねえねえ」という呼びかけ詞の使用も8人いて、T⇔Tの場合は呼

びかけ表現が豊かである。相手の名前、「あだ名」あるいは「先輩」という呼び方をするようなT⇔Tの「注目要求」には相手に対する親近感を示そうとする気持ちが反映されていると考えられる。なお、補助成分として「冗談」を使うというT⇔Tの傾向も親近感を示すということと関連していると思われる。

T J L⇔JはT⇔T以上に【A型】の使用が観察されたが、このことは難しい依頼をする際には親密な人間関係を強調することが大事だというT J Lの考え方を反映しているのではないかと推測される。

2) 「相槌的発話」

今回のデータでは、T J Lの「相槌的発話」に「ほう」「お(ん)」のような日本語には見られない例が観察された。また、音声上中国語に似ている例も見られた。実際のT J L⇔Jの会話では、「じゃ嬉しいですね」というような「相槌的発話」が使われている。これは中国語の「那太好了(我太高興了)」の直訳表現であると考えられるが、日本語にはない表現である。

今回の中国語の「相槌的発話」を調べると、「哦」「是(お)(そう)」「嗯(うん)」「啊(あ)(41回)」「真的哦(啊)」(本当)(10回)、「對(啊)」(そう、そうなの)(8回)のような表現形式が用いられていることが分かった。そしてほとんど全ての「相槌的発話」に「嗯」「哦(喔)」「お」「啊(あ)」がついていることも分かった。一方、J⇔Jで多く使用している「よね」に相当する中国語の相槌的発話は【先行部】では使用されていなかった。

今回のデータでは、T J Lの「相槌的発話」に「ほう」「おん」のような音的に中国語に似ているものがある、「よね」を伴う「相槌的発話」が少ない、という問題が見られたが、T⇔Tのデータ分析の結果と合わせて考えると、中国語母語からの影響があるのではないかと推測される。今後「相槌的発話」についてさらに質的な分析を進める必要がある。

4-4 【先行部】のまとめ

本稿では日台両母語場面と日台接触場面のロールプレイ会話をデータとし、依頼会話の【先行部】について考察した。4-1節では、「意味公式」の使用人数と使用率について、4-2節では中核の「意味公式」の使用順序、それから4-3節は談話展開の仕方及び意味公式に伴う表現形式について分析した。

主な結論は以下の4点にまとめられる。

- (1) 「苦境の説明」と「相手の状況」は使用率の一番高い意味公式であることは3場面で共通している。ただし、「相手の状況」はJ⇔Jでは全員が使用していたのに対して、T J L⇔JとT⇔TではJ⇔Jの半数ほどだった。

- (2) 「中核成分」の使用順序については、J⇔Jは【相手の状況先行型】が多いのに対して、T J L⇔JとT⇔Tは【苦境の説明先行型】が一番多い。なお、T J L⇔Jは2位の【相手の状況先行型】も多く使用している。
- (3) 「相手の状況」と「苦境の説明」を用いるとき、J⇔Jでは、「よね」などの表現形式を多く使用して相手に確認を求め、話題と相手の関連性が分かるように話を展開している。一方、T J L⇔JとT⇔Tは話題と相手の関連性への言及が少なく、自分の悩みを強調する語り方をしている。そしてT J Lは「よね」の使用が少なく、「～だ」、「～だよ」のような文末形式を多く用いている点でJと異なっている。
- (4) J⇔Jに比べてT J L⇔JとT⇔Tは「相槌的発話」の使用が少ない。T J Lの「相槌的発話」にはJに見られない不適切な発話が見られ、「よね」の使用も少ない

T J L⇔Jの依頼行動には、T J Lは上級レベルであっても、J⇔Jと異なる面が見られることを報告した。T J Lに見られる特徴が母語である中国語の影響によるものと断定することはできないが、日台母語場面に見られる相違点を考慮すると、T J Lの日本語中間言語に中国語の語用論的規範が何らかの影響を与えているのではないかという可能性も否定することはできないだろう。中間言語の語用論的転移についてさらに考察を深めていきたい。

5. おわりに

本稿では、依頼の談話の【先行部】に限定して分析を行った。談話管理成分のようなインターアクションに関わる「意味公式」を分析の対象として取り上げたことは新たな試みであった。

依頼談話を包括的に理解するためには、依頼側と被依頼側とのインターアクションを常に考慮に入れた分析が必要で、参加者双方の視点からの分析が不可欠である。本稿では被依頼側の視点が十分に分析されていないが、今後の課題としたい。

また、今回は依頼の【先行部】について調べたが、今後は依頼の言明から承諾までの【依頼部】、承諾の後の【終結部】についても取り上げ、より深い質的な分析、考察を進めていきたい。

注

- 1 接触場面とは、参加者の少なくとも一人が母語以外の言語を使っている場面である。本稿の日台接触場面とは、日本人と台湾人学習者のコミュニケーション場面のことである。本稿では、日台接触場面のことをT J L ⇔ J とし、依頼側の上級の台湾人日本語学習者 (Taiwan Japanese Learners) のことをT J L とする。
- 2 母語場面とは会話参加者同士が母語を使ってコミュニケーションを行っている場面である。本稿では日本人同士の母語場面を J ⇔ J とし、依頼側の日本人を J とする。台湾人同士の母語場面を T ⇔ T とし、依頼側の台湾人のことをT とする。
- 3 本研究では中国語または日本語の学習歴が半年を越えない者に限定した。
- 4 【終結部】については徐 (2006) に参照されたい。
- 5 意味公式の具体的な定義はOlshain & Cohen (1983: 20-21) とBeebeほか (1990: 57-58) に従う。
- 6 杉戸 (1987:88) によれば、「発話」には「実質的な発話」と「相植的な発話」の2種類のものがあるとされている。「相植的な発話」は「あそうですか」のような応答詞を中心にする発話であり、実質的な内容を積極的に表現する言語形式を含まず、また判断・要求・質問など聞き手に積極的な働きかけもしないような発話である。「実質的な発話」は「相植的な発話」以外の発話としている。本稿もこの杉戸の定義に従う。
- 7 「意味公式」の研究ではいままでも「実質的な発話」を中心に分類がなされてきており、「相植的な発話」はほとんど注目されていない。本稿では新たな試みに「相植的な発話」を意味公式として立てた。しかし、「相植的な発話」は発話機能によってもっと質的に分析する余地がある。これは今後の課題である。

引用文献

- 池田裕・三好理英子・村木万里子 (2002) 「中国語話者と英語話者の日本語における依頼—ロール・プレイによる発話データの分析—」『多摩留学生センター教育研究論集』3, 51-60、東京学芸大学・東京農工大学・電気通信大学
- 池田裕・三好理英子・村木万里子 (2005) 「日本語学習者の依頼の言語行動—中国語及び英語の母語話者と日本語母語話者の比較—」『東呉大学日本

- 語文学系2005年日語教学国際会議予稿集』, 121-135
- 謝 恩 (2001)「談話レベルから見た「依頼発話」の切り出し方—日本人大学生
同士と中国人大学生同士の依頼談話から—」『日本語教育年報』
5, 77-101, 東京外国語大学日本語課程・留学生 課共編
- 徐 孟鈴 (2006)「依頼会話【終結部】の考察—日本人・台湾人・台湾人上級学
習者の接触場面のロールプレイデータを比較して—」『言葉と文化』
7, 67-84, 名古屋大学
- 杉戸清樹 (1987)「発話のうけつぎ」『談話行動の諸相—座談資料の分析』国立
国語研究所報告92, 67-107, 三省堂
- 浜田麻里 (1995)「依頼表現の対照研究—中国語における命令依頼の方略—」
『日本語学』10, 69-75
- 水野かほる (1996)「依頼の言語行動における中間言語語用論—中国人日本語学
習者の場合—」『名古屋大学言語文化論集』X V II 卷 2 号, 91-106, 名
古屋大学出版会
- 村上京子 (1998)「外国人日本語学習者における要求場面の談話進行に関する規
範構造」『平成 8 - 9 年度科学研究費補助金研究成果報告書』, 1-46
- Beebe, L. M., Takahashi, T. and Uliss-Weltz, R. (1990). Pragmatic Transfer in ESL
Refusals. In R. Scarcella, E. Anderson, & S. Krashen (Eds.). *Developing
Communicative Competence in a Second Language*, 55-73.
Rowley, MA: Newbury House
- Blum-Kulka, S., House, J. Kasper, G. (Eds.). (1989). Cross-cultural and situational
variation in requesting behavior. 1-34. In: S. Blum-Kulka, J. House and
Gabriele Kasper.
- Kasper, G. (1998) Interlanguage Pragmatics. In H. Byrnes (Ed.) *Learning Foreign
and Second Languages*, 183-208. New York: The Modern Language
Association of America.
- Olshtain, E., & Cohen, A. (1983). Apology: A speech acts set. In N. Wolfson & E.
Judd (Eds.), *Sociolinguistics and Language Acquisition* 19-35. Rowley,
Massachusetts: Newbury House

